## 一　空飛ぶ家

ちょっと未来のこと。

僕の先祖である、君たちは、地面に家やマンションを建て、商店街を作り、田んぼでお米を、畑で野菜を栽培して生活していた。人口が増え、活用できる土地がなくなると、地下に電車走らせたり、地上高く高速道路を作ったり、海を埋め立て、工場などを建設した。

工場からは、テレビや洗濯機などの電化製品や、燃費や居住性の優れた自動車、カラフルな色彩のカーテンや絨毯など、生活する上で、魅力的な商品が次々と生まれた。

人々は、まだ使えるにも関わらず、デザインが古くさいだとか、色が褪せたとか、隣の家の人が新しい製品持っているからなど、と勝手な理由をつけ、これまで愛用してきた製品を何のためらいもなく捨て、機能を十分に使いこなしきれないにも関わらず、機能が多い方が優れていると思い込んで、新製品に手にした。新しい欲望は新たな製品を生み、新しい製品が新たな欲望を生んだ。

その後、便利な生活がより一層、便利になり、不自由から自由を獲得すると、君たちの子孫は、地面を離れ、空中に住むようになった。そう、家を空中に浮かべたのだ。空飛ぶ家だ。住まいを地上の楽園から天上の楽園へと移動させたわけだ。これには、大きな理由があるけれど、それは、後で説明しよう。

僕の家は、今、地上から千メートルの高さに浮かんでいる。もちろん、いきなり千メートルの高さに住むようになったわけでない。バベルの塔を、ピラミッドの階段を、富士山の登山道を、一歩、一歩登るように、時には滑り落ちながら、また、何かから逃れるかのように、今の高さになったわけだ。

千メートルの高さだと、人々は空を飛ぶ乗り物に使って生活している。空飛ぶ乗り物といっても多彩だ。空飛ぶ車もあれば、空飛ぶ自転車もある。自転車に乗れない小さい子供のために、空飛ぶ三輪車だってある。空飛ぶ靴に、空飛ぶサンダル。空飛ぶ草鞋に、空飛ぶ下駄だってある。残念ながら、カランコロンと音はしない。赤ちゃん用に空飛ぶベビーカーや空飛ぶゆりかごだってある。昔読んだおとぎ話じゃないけれど、空飛ぶ絨毯だってある。もう、おまじないをかけなくても、精霊の力を借りなくても、空を飛ぶことができるわけだ。

僕は、「お隣に回覧板を持っていって」と夕食を作っているお母さんから頼まれれば、空飛ぶ靴を履いて、隣の家のポストに投げ込む。日曜日の朝、まだベッドで横になっているお父さんから、「食パンを買ってきてくれ。菓子パンでもいいぞ」と頼まれれば、空飛ぶ自転車のペダルを漕いで近所のパン屋に向かう。そう、空飛ぶお使いだ。

塾に行くときは、お気に入りの空飛ぶスニーカーを履き、近くの空飛ぶ駅から、空飛ぶ電車に乗る。塾は、僕の住んでいる駅から三つ目の駅の改札口の側にある。

天気がいい日は、空飛ぶ自転車で直接行くことだってある。雨が降る日は、空飛ぶ傘をくるくる回しながら行くこともある、だけど、上昇気流が強い日は、どこに飛ばされるかわからないから、両親の空飛ぶ車で送ってもらうこともある。

「空を飛べるなんて、何て気持ちいいことだろう。素晴らしいことだろう。うらやましいことだろう」と君たち過去の人間は思うかもしれない。昔から、人は空に憧れて生きてきたからだ。

鳥のように自由に空を飛びたい。その気持ちから、紙飛行機を飛ばし、風船を膨らまし、凧を揚げ、気球に乗り、飛行機を操縦し、ロケットで宇宙に向かった。そして今、空飛ぶ家に住むようになった。人間の強い意思が強固だったため、見えない希望が石のように形となったわけだ。

だけど、空を飛ぶことや空での生活は、全然、うらやましいことじゃないんだ。実は、僕たちは、空中でないと生活ができなくなっただけなんだ。地上で生活ができないから、空中に浮かんだんだ。

それは、どういうことだって？ほら、証拠を見せよう。空飛ぶ家の塀から空の下を見てごらん。落ちないように少しだけ顔を出して。大丈夫、心配しないで。君のズボンのベルトを掴んでおいてあげるよ。何、よく見えないって。ずっとずっと下のほうだよ。望遠鏡や双眼鏡を貸そうか？君たち、昔の子どもは、テレビゲームやパソコンをやりすぎで、目が悪くなったということを歴史の教科書で習ったよ。

もちろん、僕だって、テレビも観るし、パソコンも使う。それ以上に、空に住む人間は、遠くばかり見つめているから、遠くを見つめないと生きていけないから、視力は、昔の君たちよりもずっと進化しているんだ。

じゃあ、視力はいくらだって？何を隠そう、僕の視力は、五・〇だよ。ほら、遥か彼方に見える空飛ぶ自動車やバス、トラックも、陸上を走っていた乗り物よりもスピードがずっと速いから、あっという間に、目の前にやって来る。その時点で見つけても、逃げられず、跳ねられてしまう。だから、視力がよくないと、この空の世界では生きていけないんだ。いや、生き残れないんだ。

君の目が特別だって？そんなことはないよ。学校での視力検査では、視力が五・〇以下だと眼鏡をかけないといけないとお医者さんから指導を受ける、だから、僕は、毎日、夜になると、部屋から遥か彼方の宇宙の星を見つめて、視力がよくなるように、目を鍛えているんだ。もちろん、住んでいる高さが千メートルだから、昔の君たちよりも、近くに星が見えるけれどね。

それじゃあ、おちおち、家の外に出られないんじゃないかだって？心配ご無用。乗り物は、昔のように、縦・横しかない二次元の道路じゃなく、高さもある三次元の空中道路を走る（飛ぶ？）から、思ったほど、交通事故は少ないんだ。昔で言えば、高速道路が何層にも重なっていると想像して欲しい。

また、空中では、きちんと、人が歩く（飛ぶ？）歩道と乗り物専用の道路とは別々に分かれている。万が一、車同士が衝突しそうになっても、自動制御装置が働いて、ぶつかることはないんだ。

それじゃあ、目が近視でもいいんじゃないかだって。それは甘いよ。いくら機械が全てを制御してくれると言っても、百パーセント完全、完璧じゃない。最後は、人間の力、自分の力が頼りになるんだ。それは、昔も同じだろう？

## 二　地上の世界

　さて、話を元に戻そう。何が見えたかな。どこかで見たような物が積み重なって転がっているだろう？
　そう、それらは全部、僕たち人間が出したゴミ。ゴミの山だ。ゴミの海だ。ゴミの谷だ。ゴミの自然がいっぱいだ。もちろん、僕たちだけが出したゴミじゃない。僕たちのご先祖様、そう、君たちも出し続けたゴミだ。
君たちも知っているとおり、昔の人たちは、燃やせるゴミは焼却し、燃えないゴミは大きな穴を掘り、埋め立てして処分していた。時には、そのゴミを利用して、夢の島という希望の埋め立て地を海に作ったりした。
　だけど、ゴミを出す量は相変わらず増え続けたため、焼却場はパンク状態。ゴミを積んで満載したトラックは、朝一番から夜遅くまで焼却場に行列をなしている。
　埋め立て処分場も、作った当初は深い穴だったのに、今は、盛り上がって、山となっている。上へ、上へ積んでも、次から次へと転がり落ちるありさま。今のゴミを片付けるだけで手いっぱい。ゴミの収集も処分もできないほどに追い込まれたわけだ。
　それにも関わらず、それぞれの家や会社、店舗、工場からは相変わらずゴミが排出される。人々は、仕方がないので、自分の家以外、そう道路にゴミを捨て始めた。自分の敷地から、自分の見える範囲から、外に追い出したら満足なんだ。後始末なんか知ったことじゃない。誰かがやってくれる。誰かがしろ、だ。
　最初の頃は、それでも、どこか遠くの家の前の片隅や電信柱の下に置く謙虚な心を持っていたけれど、ゴミを放るのは毎日のことなので、面倒くさくなり、こっそりと隣の家に置くようになった（もちろん、自分家の前にも他人からゴミは置かれたわけだけど、それはお互いさまだ。だけど、お互いさまと思わないのが、人間の人間たるゆえんだ。これは、君たちご先祖様から引き継いだＤＮＡのせいかな？）が、当然、そんなことでは追いつかなくなり、今度はお構いなしにどんどんと自分の家の前の道路にもゴミを放り出すようになった。ゴミはどんどんと高くなり、山のように積もっていく。
　ゴミがあるため、人々は、道路が使えなくなったし、ゴミの臭いも強烈だ。気分が悪くなり病院に入院する人も増えた、いざ、救急車が呼ばれても、道路にはゴミが山積みされており、現場に到着できなくなった。
　そのため、一方でゴミを捨てながら、一方で家を一階ずつ上に建て増しして、ゴミから逃れようとした。家だけじゃない。道路だって、道路の上に道路が作られた。電車の線路も同じだ。
ゴミが増えれば、家が高くなり、家が高くなれば、ゴミを捨てられる場所が生まれ、更にゴミを放り出す。家の階層とゴミの山のイタチごっこ。それが繰り返されるうちに、普通の家でも十階建ては珍しくなくなった。
　もちろん、住まいとして使えるのは、九階と十階の二階部分だけ。残りの一階から八階までは、ゴミで覆われている地下室みたいなものだ。かくれんぼ遊びをしていて、誤って地下室に迷い込めば、ゴミから出される有毒ガスなどのせいで、二度と地上には出てこれらなくなってしまう。

それこそ、本当に、お隠れになってしまうわけだ。
　そのうちに、十階建ての家も、もうすぐゴミで埋まりそうになった。九階部分、つまり、住まいとしては一階部分から外を見ると、屋根から雪降ろしをした後のように、ゴミが家の周りを取り囲んでいる。
　窓でも開けようならば、ゴミの雪崩現象が起き、部屋の中に流れ込んできそうだ。それならば、九階部分を住居としてはあきらめ、十階部分の上に、更に一階部分を建て増しすべきかどうか、人々は考えた。
　だけど、もう、建物は継ぎ足し、継ぎ足しを重ねてきたため、家の中を少し歩いただけでもゆらゆら揺れだし、揺れれば揺れたでよけいに大揺れして、船酔いならぬ家酔い状態。大人たちは、ビール一杯でも、お酒に酔えるので、経済的だとか、クルージングみたいで、人生の航海ができるとか喜ぶ人もいたけれど、ほとんどの人は、ブーイングの嵐。（そう、ある出来事に対して、必ず、二つ以上の異なる意見が出る。何かを言わないと気が済まないのだ。これも、君たちご先祖様からのＤＮＡのおかげだ）
「こんなところで、住めるか」と怒りの声が渦巻きだした。それに、建物は、構造計算上、もうこれ以上、上階に継ぎ足すことは不可能になった。人々は、今度は家を地面から空中に浮かせることを思いついた。そう、ここからが、空飛ぶ家のはじまり、はじまり。
　最初の空飛ぶ家は、以前の地面から百メートルぐらいの高さに位置していたが、相変わらずゴミが投げ出されるため、少しずつ、少しずつ高度を上げ、今では、千メートルの高さにまで到達した。
　それでも、家の下を覗けば、遥か彼方の地平線ではなく、真下の空飛ぶ電車の軌道の近くにまで、ゴミが迫ってきている。風の強い日には、ゴミが吹き上がり、庭に飛び込んでくることもある。庭に散らかったゴミは、ほうきを使って、また、庭の下、空の下に履き出される。ひゅーと落ちていくゴミ。そのゴミを下から、ビューと押し上げる上昇気流。
　行き場のないゴミたちは、ドラム式洗濯機の中の洗濯物のように、空中を回転し続ける。でも、人間は、洗濯物がベランダなどに干されるようには、ゴミの行き先を教えてあげない。とまどうゴミたちは、ひゅーなり、ビューなりと嘆きの声を上げながら、空を放浪し続けている。おかげで、ひゅーとビューは、僕たちの耳に慣れ親しみ、子守り歌であり、校歌でもある。

## 三　地上の探検

僕は一度、昔の地面に行ったことがある。お父さんやお母さん、学校の先生からは、決して近づかないように、と注意されていたんだけれど。
　それは、僕たちが、近所の空中公園で、野球をしていた時のことだ。僕は外野で、ボールが飛んで来るのを待っていた。カーン。ボールはバットの真芯に当たり、空高く打ち上がった。
「それ」
　僕は掛け声を上げると、空飛ぶ靴で、ボールの落下地点を追った。
　だけど、ボールのスピードの方が早かった。ボールはグラブの遥か彼方を飛んでいき、空中公園のフェンスの上を飛び越すと、真っ逆さまに地上に落ちていった。
「うわー。ボールが公園から出たよ」
「取りに行こうか」
「地上には降りちゃいけないんだ」
「仕方がないな」
「まだ、他のボールがあるよ。さあ、野球を続けよう」
　友だちたちは引き続き、野球を始めたけれど、僕はボールを探すことをあきらめきれなかった。それに、一度、地上に降りてみたかったからだ。
「ちょっとボールを探してくる」
　僕は友だちに言い残して、空飛ぶ靴のジェットを噴射させた。
「おい、待てよ」
「危ないぞ」
「早く帰って来いよ」
「先生に見つかってもしらないぞ」
「気をつけろよ」
　友だちからの応援やら忠告やら、様々な言葉が僕の背中から聞こえてきたけれど、空飛ぶ靴はその声よりも速かった。

「さあ、ボールはどこかな」
　初めて訪れた地上の世界。そこには、家から捨てられた新聞や雑誌、お菓子のビニール袋や食べ残された生ごみが至る所にちらばっていた。
「ひどい」
　これが僕の第一位印象だ。ゴミは小さな物だけではない。冷蔵庫や洗濯機。自転車や自動車だってある。
　家庭内から出された物だけではない。工場から排出された製品のくずや壊れて使用できなくなった機械もある。スーパーから出された段ボールや食品トレイなどもある。
　とてもじゃないけれど、このゴミの山の中から、ボールを見つけるのは難しい。臭いも強烈なので、鼻をつままないとその場にいられない。先生が言っていたように、有毒ガスが噴出されて

いるのかもしれない。長いは無用だ。早く探さないと。このままだと、僕までがゴミとなってしまう。
　僕は、ボールが落下したと思われる周辺に向かった。そこは十回建ての家が建ち並んでいた。昔の人が住んでいた廃墟だ。一棟だけでない。何十棟も建っている。多分、住宅団地だったんだろう。そこの団地の建物の屋根やベランダに降りたり、ガラスが割れている部屋の中にも入ったりしてみた。だけど、ボールは見つからない。
　ボールを探して団地内の家をうろうろしていると、どこかで見た家があった。どこで見たのだろう？テレビかな？映画かな？いや、違う。僕の家で、だ。
　家のどこ？仏壇だ。仏壇の側にある先祖の遺影の片隅に小さく貼ってあった写真と同じだ。その遺影は、おじいさんの、おじいさんの写真だった。
　一度、おじいさんに尋ねたことがある。
「この人、誰？」
　おじいさんは懐かしそうに答えた。
「おじいさんの、おじいさんだよ」
「おじいさんの、おじいさん？」
「じゃあ、今から何年前なの」
「そうだな、だいたい百年前になるのかなあ」
「それじゃあ、この片隅の家は？」
「地上にあったときの家だよ」
「おじいさんも住んでいたの」
「いや。わしはもう、地上から百メートル以上の空に住んでいた。だが、一度だけ、家を訪問したことがある。その時に撮った写真だ。それを見せると、おじいさんが大変喜んでくれてな。それ以来、おじいさんは自分の財布の中にしまっていたんだ。おじいさんが亡くなった後、財布から写真が見つかったので、おじいさんの遺影の隅に張り付けることにしたんだ。今も、おじいさんは、あの世でその家に住んでいるよ」
「そう」
　僕は、長い間、その写真を見つめていた。だから、直ぐに、目の前の家が、おじいさんの、おじいさんの家だとわかった。それじゃあ、その家は、僕の家だ。
　僕は、試しにドアをノックした。もちろん、返事はない。ドアには鍵がかかっていなかった。玄関から入る。廊下を通り、居間に行く。そして、和室の部屋を覗き、食堂兼居間から台所を見て回った。部屋の中は何もなかった。がらんどうだった。
　電気製品や家具などは、空中の家に運んだので何もないのは当たり前だ。押し入れの中も覗いてみた。やはり、何もない。不思議な事にゴミもなかった。ゴミは家の外に全て掃き出したのだろうか。
　二階に、実際は十階に行ってみる。階段を上る時、ギシギシと音がしたけれど、百年以上が立っているにも関わらず、家は丈夫だった。少しだけ、家が揺れた。
　部屋は四つあった。寝室と子ども部屋が二つと書斎だった。全部の部屋を見て回った。自分が住

んだ家ではなかったけれど、何だか懐かしかった。家で見た写真の影響があるのかもしれない。最後に見たのが一番奥にある子ども部屋だった。
「あった」
　そこには、バットとボールが部屋の片隅に置いてあった。でも、空から落ちたボールがガラスも割れていないのに部屋の中にあるのは不思議だ。それに、バットまでもある。この謎は、有名な探偵でも解けないだろう。
　僕はゆっくりと近づき、バットとボールを手に取った。そこには、「ツバサ」という名前が描かれていた。誰だろう？思い出した。僕のおじいさんの、おじいさんの名前だ。おじいさんの、おじいさんは二人兄弟の長男で、弟に「ハヤテ」がいた。家の写真の下に名前が書いてある。
　でも、そこに何故、バットとボールだけが置いてあるんだろう。持っていくのを忘れたのだろうか。いや、違う。おじいさんの、おじいさんの頃は、空中に住むようになって、まだ、間がなかったため、空中公園もなく、空飛ぶ靴もないため、外で、野球ができなかったんだ。そのため、おじいさんの、おじいさんは、記念に、家にバットとボールを置いてきたんだろう。もちろん、野球ができなくなったという話は、おじいさんから聞いたものだ。
　僕は、バットとボールを持って家に帰ろうとした。でも、それは、おじいさんの、おじいさんの思い出の品。空の世界に持っていけない。このまま置いておこう。おじいさんの、おじいさんもそれを望んでいるはずだ。
　僕は、家を出て、屋根に上がった。外の空気は息苦しい。鼻をつまむ。ここにいるのは、もう限界だ。ボール探しはあきらめて帰ろうとすると、雨どいに何か白いものが見えた。近づいてみる。野球のボールだ。今度こそ、僕たちが使っていたボールだ。
「何だ、こんなところにあったのか」
　探し物は、見つけにくい所じゃなくて、目の先の足元にあるものなんだ。これは、君たち先祖からの教えでもある。遠慮なく、使わせてもらうよ。ひょっとしたら、おじいさんの、おじいさんが引き寄せてくれたのかも知れない。僕は屋根の上から、バットとボールがある部屋に一礼し、雨どいのボールを掴むと空飛ぶ靴からジェットを噴射させ、友だちの待つ空中公園に向かった。

## 四　博士の研究

　　僕の近所には、そう、空飛ぶ靴で十分程度歩いた（？）所に、ある科学者が住んでいる。博士は、奥さんが早くに亡くなってしまい、子どもはいなくて、一人暮らしだった。犬や猫などのペットも飼っていなかった。自分が研究に専念するため、世話ができないからだ。

　　博士は、毎日、朝から晩まで、時には、寝る時間も惜しんで、研究に専念している。研究している間は、集中しているため寂しくはなかったが、研究が一段落着き、研究室から外に出ると、今まで黙っていたせいか、誰かと無性にしゃべりたくなった。だけど、人々は空飛ぶ家に住むようになったので、隣近所との付き合いは少ない。

　　なぜなら、お隣さんに行くのにも、以前のように気軽に歩いて行けないからだ。いくら、空飛ぶ靴があったとしても、地面を歩くようなわけにはいかない。用心しないと下から、上昇気流に乗ったゴミの襲撃を受けてしまうからだ。だけど、わざわざ、空飛ぶ車に乗っていくような距離でもない。だから、人々は、必要以外はあまり外に出ようとしなくなった。

　それで、博士は、今、その悩みを解消するべくある薬の開発に取り組んでいる。

　僕は、小さい頃から、そう、空飛ぶ三輪車に乗っていた頃から、博士の家に遊びに行っていた。今は、学校や塾の帰り、休みの日に、空飛ぶ自転車で訪問している。

　僕が博士の家を訪れるたびに、博士は、

「よく、来てくれた」

と言って、目に見えない分子や原子、素粒子のことから、僕たちが住んでいる地球のこと、人類や他の生物のこと、夜空に広がる宇宙のことなどを、時には、昔、君たちが見ていたという紙芝居で、時には、最新鋭の３Ｄ映像で、時には、博士が体を張った一人芝居で、時には、博士が開発したロボットで、何時間でも熱心に、子どもの僕でもわかりやすく説明してくれた。

　僕は、博士の話を聞くのも好きだったけれど、小さい頃は、紙芝居の前に、博士がくれるお菓子が目的だった。もちろん、今は、純粋に、知識欲が目的だ。けれど、「本や情報を買いなさいよ」と時々くれるお小遣いもまた、魅力のひとつだ。

　一週間ぶりに博士の家にやってきた。

「こんにちは」

　大声を上げた。でも、返事がない。いつもならば、「やあ、いらっしゃい」と、玄関口までやって来てくれるはずなのに。ひょっとしたら、あの研究が成功したのだろうか。

　博士が開発に取り組んでいる薬は、液体をかけると、家の中の物、テレビや洗濯機や冷蔵庫などがしゃべりだすものだ。

　僕は、最初、この薬の話を聞いた時、まさか、そんなことが実現できるのかなあ、いくら、何でも無理だろう、と思った。犬や猫だって、まだ、人間の言葉をしゃべる研究が成功していないのに、まして生き物じゃない物がしゃべるなんて信じられない。だけど、博士の熱心な話を聞いているうちに、心から応援したくなった。博士によるとこうだ。

「あーあ、誰かと話がしたい。このままでは、私は一生声を発することができないぞ」
　博士は、僕が遊びの来ない日は、毎日、家の中でこう呟いていたそうだ。
「わしでさえ話し相手がいないんだ。近所に住んでいる一人暮らしの人も、わしと同じだろう。何かいいアイデアはないかな」
　博士は家の中を、台所から居間、和室の間、バスルーム、トイレ、寝室、押し入れ、ベランダなどを歩き回った。時には、天井裏さえ覗いた。博士は何かを考えることに夢中になると歩き回る癖があった。歩き回ることで、いいアイデアが浮かぶのだそうだ。
「そうだ、目の前に多くの友人がいるじゃないか」
　博士が思いついたのが、身近にある家の中の家具や電気製品だった。使いなれた電気製品だが、話しかけることはなかった。もちろん、当り前だ。誰かが、電気製品に熱心に語りかけていたら、それこそ危ない人物と疑われてしまうだろう。
　いくら博士と親密な僕だって、博士がソファーに向かって「今日はいい天気だな。久しぶりにクッションを干してやろうか。なんだ。折角、人がよいことをしてやろうとしているのに返事がないとはどういうことだ」と怒っている姿とか、テーブルに向かって「肌触りがいいな。ベッドの代わりに寝てもいいかな。ああ、気持ちがいい」と一人でたわむれている姿を見かけたら、そっと家を出て、警察や保健所に通報するだろう。
　博士の友人（？）である、タンスや本棚、テレビや洗濯機などの家具や電化製品は、短いものは一か月、長いものは十年来のつきあいだ。共に暮らしてきた仲間であり、共に時間を共有してきた生活者だ。
　タイマーを回し過ぎて、食パンを真っ黒にしてしまったトースター。お湯が沸いたことに気がつかないで、火を点けっぱなしにしてしまい、やかんからお湯が噴き出てしまったガスレンジ。卵をゆで卵にしようとして爆発させた電子レンジ。など、など。語り尽くせない思い出がある。もちろん、ほとんどが博士の失敗のせいで、電気製品等に何の責任もない。
　思いついたら吉だ。早速、博士は研究に取り掛かった。それこそ、寝食を忘れ、僕とも話すことも忘れ、何百回、何千回、何万回と挑戦し、何百回、何千回、何万回と失敗を繰り返した。それでも博士は、成功するまで諦めなかった。いや、必ず、成功すると信じていた。

## 五　シャベラー完成

「つ、ついに。で、できたぞ」
　博士は、ソファーに体全身で座りこんだ。ソファーが黙って暖かく迎えてくれた。長い時間の研究の結果、薬の開発に見事に成功したのだ。本当なら、飛び上がらんばかりに喜びの声を上げるべきなのだが、全神経、全体力を使い果たしたため、倒れこんでしまった。
　ちょうど、その時に、僕は、博士の家を訪れた。倒れこんでいる博士を見つけ、僕は慌てて、駆け寄った。
「博士、大丈夫ですか」
「ああ、君か。よく、来てくれた。長い間、研究してきた薬が、ついにできたんだ。名づけて「シャベラー」だ」
「「シャベラー」ですか？」
「そうだ。物がしゃべるから、「シャベラー」だ。しゃべって欲しい願望も込めての「シャベラー」だ」
「それは、よかったですね」
　僕は、博士を抱き起こそうと手を差し出した。
「ありがとう。だが、こんなことしている場合ではないぞ」
　博士は、自分で立ち上がると、手の中に握りしめていたガラス瓶を持って、研究室から外に走り出た。僕も、博士の後に着いて行く。
　博士は、まずは、居間に飛び込んだ。そして、テレビに「シャベラー」を振り掛けた。
　僕は、博士の後ろから声を掛けた。
「どうなるんですか？」
　博士は、振り返って、まあ見ていなさいという顔で、僕の顔を見てにやりと笑った。
　間もなく、スイッチも押していないのに、テレビが
「博士、おはようございます。最初のニュースをお伝えします。まずは、博士が、長い間、研究を積み重ねてきた物がしゃべる「シャベラー」の薬の開発がついに完成しました。私がしゃべっている通り、薬には素晴らしい効果があります。これは、世界的な発明です。ノーベル賞はもちろんのこと、世界中のあらゆる科学賞が博士に授与されるでしょう。それだけではありません。この「シャベラー」のおかげで、これまで一人暮らしの方が、今後、孤独から解放されます。博士、本当におめでとうございます。そして、私に言葉をくれて、本当にありがとうございます」
　いきなり、テレビが、原稿もないのに博士の薬の成果について語り始めた。テレビなんて、番組を放映するただの機械だと思っていたけれど、意思を持ってしゃべりだしたので僕はびっくりした。横に立つ博士を見ると、博士は当然だと言うような顔でにこにことうなずいている。テレビが、また、しゃべりだした。
「次は、天気予報です。今日の天気は、一日中、雲もなく晴れ渡り、気温は三十度近くなるでしょう。降水確率はゼロパーセントです。洗濯物も良く乾くでしょう。博士！研究に専念しすぎた

ために、洗濯物がたまっています。今日、全て洗って干しておいてください。また、紫外線は、少し強いですので、外に出るときは、必ず帽子をかぶりましょう。博士！今まで、研究室に閉じこもっていたので、たまには、外に出て、日光に当たって、体を動かしてください。そうしないと、病気になりますよ」
と、博士の健康の事まで心配してくれる。なんてやさしいんだ。でも、少し、おせっかいのような気もする。
　ようやく博士が口を開いた。
「やった。大成功だ。だが、テレビから音が出るのは当たり前だ。他の物はないかな」
　博士は部屋の中をキョロキョロ見回している。
「すごいですね。びっくりで、言葉が出ません。僕にも、「シャベラー」を振り掛けてください」
　僕は感嘆の声とジョークを口にしたが、博士は自分の研究の成果を確かめることに夢中で、返事がなかった。僕は、ただ、ただ、博士の後を追い掛けた。
　博士の足と視点が止まった。人間が生きるために切っても切れないのは食事。その源の、冷蔵庫に薬を振り掛けた。すると
「博士。こんにちは。ようやく、お話しができて光栄です。ですが、冷蔵室の中には何も食べ物がありません。飲みかけの牛乳が半分残っているだけです。それも、今は、腐ってチーズ状態です。残念ですが、博士の期待に何も応えられません」
と、小さな声ですまなそうに呟く。
「うーん、そうか。研究に専念しすぎて、食料品の買い出しするのを忘れていた。確かに、お腹がぺちゃんこだ」
　博士のお腹からは、薬をかけていないのにも関わらず、「くーくーくー」という音が鳴っている。
　それでも、博士はその音を気にしないで、今まで話す相手がいなくて寂しかったせいか、物がしゃべるなんてこんなに楽しいことはないと、家中のありとあらゆるところに薬を振り掛け続けた。
　おかげで家中、廊下から階段、天井にいたるまで、次々と物がしゃべり始めた。
「博士、おはようございます」
「博士、今日もいい天気ですね」
「博士、どこかへお出かけですか」
「博士、たまには掃除してくださいよ」
「博士、家の中の空気が淀んでいます。喚起が必要です」
など、様々だ。
　博士は、これに対して「やあ、おはよう」「いい天気だね」「ピクニックでも行くか」「いやあ、悪かった。研究に専念したもので。早速、掃除するか」「そうだな。窓を開けよう」など、次々と話し掛けてくる相手への返事に追われて、寂しさなんて感じる暇がなくなった。
「くーくーく」

　再び、博士のお腹が鳴った。
「おや、何かがしゃべっているぞ。そうか、私のお腹が鳴っているのか」
　博士は、自分のお腹をさすりながら、ようやくお腹がすいたことに気がついた。
「君も一緒に食べるか」
　博士は僕に振り返った。
「はい。ありがとうございます」
　二人は、キッチンに入った。先ほど、冷蔵庫からは食べ物がないと言われていたので、何か食べられる物がないかと、戸棚の奥や床下収納庫などを隅から隅まで探した。
「博士。ありました」
　僕はインスタントラーメンとさんまの缶詰、デザートの桃の缶詰を見つけた。
「よくやった。これだけあれば、当座はしのげるぞ。後で、ゆっくりとスーパーに買い出しに行こう」
　博士は、おしゃべりしながら楽しく料理を作ろうと思ったのか、キッチンにも薬を振り掛けた。キッチンも勢いよくしゃべりだす。
「博士。こんにちは。今から料理ですか。そうそう、最近、洗い場をあまり使っていないので少し汚れています。作る前にちょっときれいにしてくれませんか」
　博士は、キッチンの言うことはもっともだと思い、スポンジに洗剤をつけ、キッチンを洗うことにした。その時、キッチンの台の上に置いた「シャベラー」の薬瓶に左肘が当たった。薬瓶はシンクに転がった。ドクドクと排水口に流れ出す「シャベラー」。
「しまった。薬が流れ出てしまったぞ」
　博士は、慌てて瓶を掴んだが、薬はほとんどが残っていなかった。僕も、博士と一緒に、キッチンの流し口をじっと見つめた。

## 六　ゴミの反乱

「シャベラー」は、排水口から配管を通り、空中の家から外に流れ出ると地面に落ちていく。昔、人々が住んでいた十階建ての家の間を通り過ぎ、地面に積み重ねられたテレビや洗濯機など電化製品の間や生ごみのビニール袋の間も縫うように落ち、大昔、道路と呼ばれていたアスファルトに吸い込まれていった。

僕と博士は、排水口から何か聞えないかと耳を澄ませていたが、何事も起きなかった。しばらくして、怒鳴り声が聞えた。地上千メートルにも届く大声だった。

「どけろ。どけろ。これまで、何百年、何千年と我慢に我慢を重ねてきたが、もう限界だ。人間ども、このゴミをどけろ、どけろ。今すぐ、どけろ」

声の主は道路だった。道路は体全体を波打たせた。この道路につながっているすべての道路もうねり始めた。その振動のせいで、道路に積もった無数のゴミがトランポリンの上でジャンプするように上下しだし、ついに火山の噴火のごとく、空高く舞い上がった。空中の家々の底に、塀に、ゴミが衝突する。

「わあ、大変だ。博士。家が揺れます」

「君、大丈夫か。いや、大丈夫じゃないな」

僕と博士は家の柱に思わずにしがみついた。

地球上のありとあらゆるところで、

「これは、どうしたことだ」

「ゴミの反乱だ」

「俺たちは何も悪いことはしていないぞ」

「そう思い込んでいるだけじゃないのか」

「ゴミには意思はないんだから、何かの影響で、ゴミの台風が起こっているんだ」

「それじゃあ、ゴミフーンだ」

「そんな冗談を言っている場合か」

の声が、ゴミの嵐の隙間から飛び交う。

人々は慌てて空飛ぶ家の地面を上から押さえた。だが、そんなことをしても無駄だった。なにしろ、この家の地面さえも浮いているのだから。

次から次へと地上から飛んでくるミサイルのような勢いのゴミに、空飛ぶ家は玉突きのごとく突き上げられた。空にエベレーターがあるかのように、家はどんどんと上昇していく。

「ひゃー。博士。家が飛んでいきます」

「すごい力じゃな。ロケットよりも速いスピードじゃ」

「どこまで行くんでしょうか」

「わしにもわからん」

空飛ぶ家々は、大気圏を通り過ぎ、地球を飛び出してしまった。

「博士。ここは宇宙ですよ。下に地球が見えます。あまり青くないですね。僕は「地球は青か

った」と教えられてきたのですが」
「そうじゃな。確かに、青くないな。どちらかと言えば、茶色じゃな」
「これもゴミのせいですか」
「残念だが、そうだろう」
「僕たち、宇宙にいても大丈夫ですか」
「それは、大丈夫じゃ。安心しなさい。こんな時のために、それぞれの家は宇宙船のように作られているんじゃ。さあ、ドームを閉めよう」
　博士が壁のボタンを押すと、家の塀から透明の壁が出て来て、家と庭をすっぽりと覆った。
「さあ、これからどうしますか。博士」
「うーん。どうしよう」
　その時だ。
「まずは、掃除」
「そうだよ。掃除だよ」
と家の外から声がする。
　僕は、窓ガラスから庭を見る。そこには、おじいさんの、おじいさんのバットとボールがあった。このバットたちも、道路の怒りの噴火でここまで飛んできたのだ。
「さあ。掃除だ」
「そう。掃除だ」
　バットとボールは、慣れない体で、吹き上がって来たゴミを掃こうとしている。でも、バットとボールでは、上手く集められない。
「僕も手伝うよ」
　このゴミは、おじいさんの、おじいさんの時からあるけれど、今の僕たちにも責任がある。僕は家の外に出ると、バットとボールと一緒に、庭を掃き始めた。
「それじゃあ、わしは料理でもするか。腹が減っては、いい考えも浮かばん」
　博士は、キッチンの上に並んだインスタンラーメンを食べるため、お湯を沸かし始めた。

　その後、どうなったかだって。ご先祖様の君たちにも教えてあげよう。
　地球のゴミと一緒に宇宙の塵となった僕たち人間は、
「自分たちが撒いたゴミは、自分たちで片付けなさい」と、「シャベラー」のおかげで声を得たゴミたちの命令のもと、宇宙に漂っていたり、地球にまだ残っているゴミを、宇宙を飛ぶ収集車に乗って、せっせと集めた。
　燃やせるゴミは、週に二回、太陽に放り込み、燃えないゴミは月に二回、ゴミなどで海を埋め立てた要領で、宇宙に、もうひとつの地球である「夢の星」づくりに励んでいる。
　博士はというと、「昔、地球は青かった」を「今も、地球は青い」というキャッチフレーズに変えるべく、ゴミを資源として有効に活用できる薬の研究に没頭している。
　もちろん、もう寂しさなんて感じない。周りには、研究助手の僕を始め、研究を応援してくれしゃべるフラスコやビーカー、お腹が空いた時に料理を手伝ってくれる冷蔵庫やキッチン、疲れた

時に体を癒してくれるソファーやベッド、そして、掃除を手伝ってくれる僕のおじいさんの、おじいさんのバットとボールがいるのだから。